



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	「中国書道辞典」の正誤考異 New Approaches to Correcting and Revising the Chinese Calligraphy Dictionary
Author(s)	花田 尊文 (HANADA Takafumi)
Citation	文林 (BUNRIN), No.36 : 97-123
Issue Date	2002
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

「中国書道辞典」の正誤考異

花 田 尊 文

前稿「書道辞典を電子化する」¹⁾で述べたことであるが、入力ミスのチェック、誤字誤植等の再点検の作業をその後継続してきた。これは現在 Mac 用である書類を Windows 用に変換するためにもしておかなければならない作業であり意外に手間と時間を要している。そのため予定していた Windows 化はまだ実現していない。ところで、この作業の中で予想外に多くの過誤や判断に迷う記述に遭遇した。かねてよりこの「中国書道辞典」²⁾（以下、本書とする）は利用者の間で間違いが散見されるとの風評があり筆者も耳にはしていたが具体的にどういうことを言っているのか判らなかった。しかし今回の作業を通してその理由と内容が明らかとなった。その殆どは誤字誤植と思われるものであるが前稿でも触れたように編者は故人となり編集資料も所在不明という現状では確認の方法がない。結局は各種年表や辞典、史書その他の文献や関連資料によって間接的に検証することになる。ところが、これがまさに藪蛇で調査検証のために参照した資料により新たな食い違いや疑問が発生し更にその解決が困難になるという事態に度々陥った。厄介なことに手を出したものと後悔しきりである。もとより辞書の正誤考異などという作業は碩学の手になねられるべきものであり筆者ごとき学力、見識、経験共に貧困なる者の手に負えるものではない。結局のところ未検証や未確認のものも多く課題を残す結果となった。しかし本書の利用者のこうむる不利益を思うに判ったところから、判り得

るところまで、だけでも発表することは無意味ではないと思う。筆者自身も自覚しているがその方法も使用した文献や資料も充分なものとは言えない。只々諸賢のご批正を乞う次第である。

さて本書の記述に関する問題だが、例えば記載の年号と西暦が食い違っている箇所がある。そのどちらが正しい情報なのか別の資料を調べなければ判らないわけで本書の辞書としての機能が發揮できない。本来、辞書は工具書でありその記述を信じて引用したり調査研究に利用するものであるから真面目に考えれば事は重大である。それから存在しない年号の記載がある。これは一般的な年表では判らないがより詳しい専門的な資料に当たれば判明するものと、碑とか法書とかその書跡自体に存在のない記年のあるものがある。後者の場合は大抵その理由が判らない。そしてこのような例は分裂時代や混乱期に多く見られる。

以下誤りや考察を要した項目や箇所について列挙していくが本書は縦書きで1ページが3段組、1段は挿入図などがなければ28行ある。そこで最初に掲載ページを、次に何段目かを上中下と区別し、3番目に行頭から何行目かの数字を、その次にその項目を/で区切って表示し指摘すべき問題箇所はその部分に下線を付して示した。そしてページ/段/行/と問題箇所は太字とした。また項目の記述は全文を引用する必要もないので省略部分は……で表現した。筆者が使用したのは第3刷版、本校図書館蔵書は第2刷版である。本稿と「中国書道辞典」を照合しながら見ていただければ幸いである。なお本稿の英文タイトルについて厚顔しくも松平陽子先生にお知恵を借りた。恐縮にも英国人教員の方にもまでご意見を聞いて下さり誠に懇切なるご教示を頂戴した。ここに記して感謝の意を表したい。

P21/中/18/いんしょう《印章》(P18より)

(特殊印)の項 ……⑥西夏印—西夏国(一〇三八～一二二七)の官印。……

東方年表³⁾では西暦1032～1228、必携中国美術年表⁴⁾では西暦1032～1227、新選漢和辞典改訂新版付録/中国学芸年表⁵⁾では西暦1032～1227、大漢語林⁶⁾ P1267に西暦1038～1227(遼史、二国外記、西夏伝)とあり一致しない。いずれを採るか選択根拠の問題はあるが本書は西夏伝に拠ったものであろう。但し前述の諸説についての考察は未着手である。

P26/中/23/いんふがい〔殷・不害〕(北魏・正始二～陳・禎明三 505～589)

東方年表のように禎明2年(588)までしか出ていない年表もあるが、歴代人物年里碑傳綜表⁷⁾ P98の殷不害の項に魏・正始2(505)～陳・禎明3(589)(陳書卷32)とあり本書は陳書に拠ったものであろう。

P35/上/19/えいかくめい「瘞鶴銘」

梁の天監13年(514)の刻(推定)。……

本書P745～6の「天監石井欄題字(てんかんせきせいらいんだいじ)」の項に天監一五年の記述があり諸年表にも天監とある。藍「らん」ではなく監「かん」が正しい。誤植であろう。

P36/下/3/えいき〔衛・覲〕(魏)

他資料によっても生卒不詳である。魏の人とあるが生年は本記中に ……

漢末、尚書に官したが、魏国建つに及んで侍中に任じ、……とあり、後漢末である。後漢～魏とするほうがよいだろう。

P49/上/3/えんとくげんぼし「閻德源墓誌」

金の大定三〇年（一一九〇）の刻、……

諸年表⁸⁾によれば大定は29年（1189）まで、西暦1190年は明昌1年と改元されている。本項に部分図があるが紀年部分は出ておらず今のところ他資料による確認もできない。仮に大定30年と刻されているとするならなぜ存在しない年号を記したのか？ よって現在のところ正しい刻年については未検証である。

P50/下/3/おうあぜんぞうぞうき「王阿善造像記」

梁の隆緒元年（五二六）の刻、……

諸年表によれば梁にこの年号はない。また隆緒の年号そのものが見えない。西暦526年は梁・普通7年である。本項に部分図があり記年部分は微細なため拡大しないと判然としないが確かに隆緒元年と刻されている。『北京大学図書館蔵歴代金石拓本精華』⁹⁾ P105～106にカラー図版（陳介祺跋付）と解説があり。隆緒元年（527）11月25日刻。陝西省出土、原石は1959年中国歴史博物館入り現在同館蔵。高29cm、幅28cm、奥行11cmとある。隆緒は隠し年号なので出てこないわけである。しかし隠し年号使用の理由と本書では西暦を526年としている点については現在未検証。

P70/中/11～12/おうじゅん [王・珣] (東晋・永和六～隆安四 349～400)

諸年表によれば永和6年は西暦350年、西暦349年は永和5年である。年号と西暦に食い違いがある。書道辞典¹⁰⁾ P67 (中田勇次郎解説) に永和5 (349)～隆安4 (400)、中国書道全集第2巻¹¹⁾ P168～9 (藤原有仁解説) に西暦350～401、ヴィジュアル書芸術全集第4巻¹²⁾ P141に西暦349～400、歴代人物年里碑傳綜表P56の王珣の項に永和6 (350)～隆安5 (401) (晋書巻65、或作生永和5年) とあり永和5 (349)～隆安4 (400) と、永和6 (350)～隆安5 (401) の二説のどちらかとなる。但し現在のところこれを判定する資料がなくその考察については未着手である。

P73/中/9/おうしん [王・宸]

……官を罷めた時、貧にして帰るを得ず、往いて制府秋帆畢阮に依り、家を挈えて武昌に寓し、……

誤字誤植か？ 読みと送り仮名が合わないし意味も判然としない。「携えて」なら「たずさえて」、「挈けて」なら「ひっさげて」と読みは下るが適当であろうか。現在のところ編者が参考にしたと考えられる原書については未調査。

P79/下/19/おうちしけつ「王稚子闕」

後漢の興元元年 (一〇五) の刻。……

諸年表によれば西暦105年は元興1年である。興元の年号は唐の徳宗の784年に1年だけあるが時代が合わない。ヴィジュアル書芸術全集第2巻¹³⁾

P118～9に図版と解説があり、確かに元興元年と見える。誤植であろう。

P86/中/4～5/おうべん [王・冕] (明・至元一～永楽五 1335～1407)

至元は元の年号、永楽は明の年号であるからここは元・至元一～明・永楽五とした方がよい。ところで中国印学年表¹⁴⁾ P4～5には1287(至元24)～1359(至正19)とあり、歴代人物年里碑傳綜表P400に元世祖・至元1(1287)～元順帝・至正19(1359)(朱彝尊王冕傳、明史卷285文苑傳附宋濂傳、或作生至元元年丁亥/1335年、茲從吳榮光年譜、汪宗衍有考)とありこの後説を採れば本項の記述と合う。但し異説の生卒年についての考察は未着手である。

P101/中/16/かいはくだつぞうぞうき「解伯達造像記」

北魏の太和年間(四七七～五〇〇)の刻(太和年造とのみあって年次を欠く)。……

諸年表によれば太和は23年(499)まで、西暦500年は景明1年と改元されている。よって太和年間(477～499)とするが正確。

P104/上/11/かがくきんせきし『華獄金石志』

……道光一一年(一九〇四)『華獄志』に刻入。光緒三〇年(一九〇四)補刻本がある。

諸年表によれば道光11年は西暦1831年、1904年は光緒30年である。次行に光緒30年(1904)とあるので恐らく西暦の誤植と思われ道光11年(1831)が正しいと考えるが未確認。

P106/中/27/かきんぼし「賈瑾墓誌」

北魏の普泰三年（五三三）の刻。……

諸年表によれば普泰は元年（531）のみで西暦533年は永熙2年である。書道辞典P106～7（赤井清美解説）に普泰1年（531）とあり、中国石刻大観/資料篇4¹⁵⁾ P232の解説にも普泰1年（531）とありP233の全搨拓図によれば大魏普泰元年と確かに刻されている。よって普泰1年（531）と訂正。

P116/中/18/かこうげん〔夏侯・玄〕（魏・建安一四～正元一 209～254）

諸年表によれば209年の建安は後漢の年号である。歴代人物年里碑傳綜表P37に漢獻帝・建安14（209）～歿年不明（三国志卷9魏書）とあり、中国歴代年譜総録¹⁶⁾ P58に漢建安十四年生、魏正元元年卒（209～254）夏侯玄文学系年、陸侃如編、中古文学系年卷五至卷六とある。よって（後漢・建安14～魏・正元1 209～254）としたほうがよい。

P121/下/5～6/がしょうひょう「賀捷表」

魏の*鍾繇の書と伝えるもの。正書一三行・行一二字、末に「建安廿四年閏月九日南蕃東武亭侯臣繇上」とあり、これを信ずれば六九歳の作である。……

建安は後漢の年号である。鍾繇は魏代書壇の大宗ではあるがこの記年を信ずるなら本作は後漢時代のものである。「魏の」を外した方がよいのではないか、但し曹操は西暦216年から魏国を称しており建安25年（220）10月には魏は後漢から受禅し漢は亡んだ。「魏の」が誤りとは言いきれない。

P127/下/14/かつじ《活字》

……五代の宰相馮道が組活字印刷に熱情を傾けてから著るしく実用化し、あらゆる文書は人間の手書きから離れて、活字によって量産されるようになり、五代の文化がひどく変遷する緒を開いた。……

変遷では「へんぱく」である。遷ではなく貌つまり変貌「へんぼう」が正しい。

P145/下/26/かんしんぼし「韓震墓誌」

北魏の普泰二年（五三二）の刻。……

東方年表によれば西暦532年の北魏は中興 2（～3月）、太昌 1（4～11月）、永興 1（12月）、永熙 1（12月～）とめまぐるしく改元しているが普泰はない（普泰は前年531年の2～9月の間だけ）。一方、中国歴代年表¹⁷⁾によれば北魏節閔帝（恭）普泰 1 年（531）、同 2 年（532）、更に同年（末？）永熙元年と改め永熙は 3 年（534）まで、とあり普泰 2 年はある。一方別の年号も併記されていて531年10月、魏安定（安徽湖北省の境）で中興と改元、532年 4 月魏の出帝が太昌と改め、12月に永興と改め、更に尋で永熙と改元とある。これによれば東西二重政権の混乱期にあった¹⁸⁾ 当時の北魏において、地域によっては普泰 2 年（532）はあったと考えてもよいだろう。

P152/上/3～4/かんのしょうてい〔漢章帝〕後漢・永平一～章和二 58～88)

後漢第三代の帝、明帝の第五子である。父帝の苛政を厭って、寛厚な政

治を行い、声望があったが、若くして卒した。在位一三年。……

諸年表により在位期間は永平18年～章和2年（75～88）の14年間と判る。本項には13年とあるが明帝歿が永平18年8月で次帝（章帝）即位となりその年の残月を勘定に入れず翌年改元の建初1年から計算したものであろう。より正確には13年と数カ月間となる。しかし生年が判らない中国歴代年表、歴代人物年里碑傳綜表、中国歴代年譜総録にも記事がない。中国の歴史第2巻に以下の記述¹⁹⁾がある。「明帝は30歳で即位して、在位18年、永平18年（75）に48歳で死去し、その子の皇太子^{たつ}烜が21歳で即位した、これを章帝（在位76～88）という。章帝は在位12年、章和2年（88）に33歳で死去し、その子の皇太子^{ちやう}肇が10歳で即位した。和帝である。」これを手がかりにその生年の計算を試みたのであるが西暦75年に21歳で即位、西暦88年に33歳で死去とあり1年の食い違いが生じる。つまり即位時の歳を基準にすれば西暦54年（建武30）生、卒時の歳を基準にすれば西暦55年（建武31）生となる。また在位76～88と記しながら在位12年と1年少なく勘定しておりここでも計算が合わない。いずれにしても1世紀半ば頃の生まれとしてよいだろう。また本項の生卒からは30歳死去ということになり33歳説と食い違いが生じる。よって本考察の3説のいずれが正しいのか、或いは全て誤りなのかこれらの数値をより確実な資料に照らして検証するまでは結論が出せない。今後の課題である。

P164/下/3/ぎそうぼうとうぞうぞうき「魏僧□等造像記」

北魏の永平三年（五三〇）の刻。……

諸年表によれば永平3年は西暦510年、西暦530年は永安3年または建明1

文林 三十六号

年である。書道辞典P152に同項目（赤井清美解説）があり永平三年（五一〇）とある。西暦は510年が正しい。

P167/中/18/ぎとくぎきゅうし「魏徳義樞誌」

北魏の孝昌四年（五二八）の造。……

東方年表によれば西暦528年は武泰 1（～3月）、建義 1（4～8月）、永安 1（9月～）とあり孝昌は3年（527）までで4年はない。なぜ存在しない年号を記したのかは判らない。ただこの年洛陽は宮廷内の抗争に爾朱榮の軍がからみ北魏は大混乱にあった²⁰⁾、このような状況が関係したであろうことは想像できる。但し現在のところ本樞誌の図版や拓本については未確認である。

P194/下/3/ぎれいぞうぞうぞうき「魏靈蔵造像記」

北魏の景明年間（五〇〇～五〇四）刻と推定されるもの。……

諸年表によれば景明は西暦503年の3年まで西暦504年からは正始と改元している。よってここは500～503とするが正確。

P210/上/14/くじゅんじょう『苦筍帖』

唐の＊懷素の書と伝えるもの。……これが真蹟はもと清の内府に伝わり、今は故宮博物館に保存されている。……

中国書道全集第4巻²¹⁾ P172（中田勇次郎解説）に懷素、絹本、25.1×12 cm、上海博物館蔵とある。またにカラー図版も出ている。

P235/中/12/げんこうひりげんきょうぼし「元顯妃李元姜墓誌」

挿入位置に問題あり、P237/下/7/けんこうどりょうじっけんこう『権衡
度量実験考』の項の後へ移動。

P251/上/4/げんこぼし「元祐墓誌」

挿入位置に問題あり、P237/下/17/げんこうもん〔元・好問〕の項の後へ
移動。（但し初刷版は正しい位置にある）

P268/中/14/こうこつぶん【甲骨文】

……〔甲骨文の研究〕 劉鶚の『鉄雲蔵龜』は拓影を載せるのみで、文
字の解説は試みていない。……参考すべき資料が少なく、従ってその説の
如きも住々にして武断にわたるを免れないが、推輪の功は没すべからざる
ものがある。……

推輪では「すいりん」でおかしい、輪ではなく論の誤字誤植と思われる。
つまり推論「すいろん」であろう。

P277/中/10/こうしょうこう〔孔・昭孔〕（清）

……また宋徐鼎臣臨秦碣石頌一卷（孔昭孔雙鉤、同知六年劉氏刻本）と
いうがあるが、偽刻である。

清の年号なら同治であろう単なる誤植と思われる。しかし偽刻とあるから
同知と記してあるのかも知れない。原本については未確認である。

P278/下/25/こうしょく [江・武] (北魏)

生卒について歴代人物年里碑傳綜表²²⁾にも中国歴代年譜総録にも記載がない。書道辞典P229 (竹石古谿解説) に「こうしき」の項があり、生歿未詳、正光中 (520～525) 歿とある。

P279/上/24/こうしょさんび「黄初三碑」

三国魏の黄初年 (二二〇～二二七) に建立された三碑、すなわち * 「上尊号碑」 (二二〇) * 「受禅表」 (二二〇) * 「孔羨碑」 (二二〇) をいう。

.....

諸年表によれば黄初年間は西暦220～226年である。西暦227年は太和1年である。ところで三碑共に黄初1年 (220) の建立なので、年間表示ではなく黄初初年または黄初元年 (220) としてよいのではないか。

P283/下/12/こうせん [高泉]

……隠元に招かれて寛文六年 (一六六一) 日本に來り、……

諸年表によれば寛文6年は西暦1666年、西暦1661年は寛文1年である。書道辞典P229 (北川博邦解説) に高泉の項はあるが來日時期についての記載はない。新選禅林墨場必携²³⁾ P591に「……十三歳で得度、寛文元年 (1661) 來日、……」とある。つまり西暦は正しく年号が六年ではなく元年である。誤植であろう。

P288/中/21/こうたいでんほうふ『交泰殿宝譜』

……易培基の題面、前に乾隆六二年御筆匣衍記及び乾隆一一年・一三年の二序がある。……

乾隆は60年（1795）まで62年はない。中国印学年表P36に1748、乾隆13、戊辰、内府輯成、「交泰殿宝譜」1冊とある。本項に乾隆11年、13年の二序とあるから時間的に考察すれば62年ではなく11、12、13年のいずれかであろう。誤字誤植の可能性が高い、但し原本については未確認。

P292/中/11/こうどうしゅう〔黄・道周〕（明・万曆一三～隆武一 1585～1646）

一般には明滅亡を毅宗（莊烈帝）の崇禎17年（1644）とするが以後も明の諸王は南方各地で清軍に抵抗を続けた。これを南明政権というがこの扱いをめぐる史家の明亡についての見解に相違があり、福王とするもの、桂王（永明王）とするものなど諸説がある。黄道周はこの明亡の混乱期にあって明朝回復のため各地を転戦しついに清軍に捕らえられ南京に連行され翌年処刑された義勇の忠臣である。彼の忠節に敬意を払うなら学問的とは言えないがその歿年に南明政権期の明の年号を当ててもよいのではないか。諸年表によれば明の隆武1年は西暦1645年、西暦1646年は（福王）隆武2年または（唐王）紹武1年に当る。歴代人物年里碑傳綜表P481に明・萬曆13（1585）～清・順治3（1646）（明史卷255、洪思撰廣獲注黄道周年譜、莊起儔撰漳浦先生年譜魏書）とあり順治3年（1646）は前述の南明政権の福王、唐王期に当る。大漢語林P1596黄道周の項に1585～1646（明史255、明儒学案56）、書道辞典P241（小林斗盦解説）に明・万曆13～清・順治3

(1585～1646 62歳)、ヴィジュアル書芸術全集第8巻²⁴⁾ P30、P31、P127に1585～1646(紹武1年)とある。中国歴代年譜総録P198には明万曆十三年生、弘光元年卒(1585～1645)とある。彼は唐王に仕えたのが最後だからその歿年は他資料からも示されているように紹武1年(1646)として概ね正解であろう。しかし、実は年号と西暦の関係はもう少し複雑である。東方年表には弘光1年(1645/～6月)、隆武1年(1645/7月～)、同2年(1646/～10月)、紹武1年(1646/11月～)、永曆1年(1647)、永曆は15年(1661)までとある。必携中国美術年表には弘光1年(1645)、隆武1～2年(1645～1646)、紹武1年(1646)、永曆1～16年(1647～1662)とある。ヴィジュアル書芸術全集第8巻P29～30の年表には弘光1年(1645)、隆武1年(1645)、紹武1年(1646)、永曆1～15年(1647～1661)とある。中国歴代年表には宏光1年(1644/5月～)、宏光2年(1645/～6月)、隆武1年(1645/7月～)、同2年(1646/～10月)、永曆1年(1646/11月～)、永曆は16年(1661)までとあり紹武の年号は見えない。さて隆武2年、紹武1年、永曆1年いずれの可能性もある西暦1646年をどう解釈したものか。

P293/上/13/こうとうれいおうくんだんび「膠東令王君断碑」

魏の黄初年間(二二〇～二二七)の刻。……

P279「黄初三碑」と同様、諸年表によれば黄初年間は西暦220～226年である。西暦227年は太和1年である。黄初年間(220～226)とするが正解。

P297/上/19/こうぶしょうぐんちょうさんひ「広武將軍張產碑」

苻秦の建元四年（三六八）の刻。……

大漢語林P1181に晋書112、魏書95を引用し苻健の項あり。符ではなく草かんむりの苻である。ヴィジュアル書芸術全集第4巻P18～20の年表に、苻の苻健、前秦を興す。前秦の苻健、前燕を滅ぼす。苻健、前涼を滅ぼす。の記述あり。必携中国美術年表P124に前秦・苻氏とある。つまり苻氏の前秦だから苻秦が正しい。

P301/中/7/こうみんいんし『皇明印史』

明の*邵潜篆、第一・三卷陳繼儒校、第二・四卷趙宦光校。……天啓九年（一六二九）成る。

諸年表によると天啓は7年（1627）までで9年はない。西暦1629年は崇禎2年である。中国印学年表P15に1621、天啓1、辛酉、邵潜輯自刻印成「皇明印史」4巻とあり、これが正しければ本項の西暦1629年も誤りとなる。しかしいずれが正しいのか原本を目撃できないので現在のところ未確認。

P325/上/11/こしきんせきよちそうしょ『顧氏金石輿地叢書』

民国の*顧燮光輯。……『中州金石考』八卷、清黄叔微撰。……

本書P275「こうしゅくけい」の項に「黄叔微」とあり、歴代人物年里碑傳綜表P559に黄叔微（清史列傳卷67、国朝耆獻類微卷209、国朝先正事略

卷10) とある。倣ではなく倣が正しい。

P326/中/12/こしぼん『顧氏本』

明の*顧從義の刻。……隆慶八年（一五七四）にいたって、巻首に五色印をもって、他の贋本と区別する一文を載せていることによってそれがわかる。……

諸年表によると隆慶は6年（1572）までで8年はない。西暦1574年は万暦2年である。法帖事典²⁵⁾ P56には隆慶2年（1568）とある。この記事が正しいのか、はたまた本書の西暦が正しいかどうか現在のところ未確認。

P352/上/15/さいこう [崔・宏] 北魏・?～義熙一四 ?～418

義熙は東晋の年号である。生年は不明であるが北魏とするのは年代的に考えて不自然であろう、歴代人物年里碑傳綜表P66に?～晋安帝・義熙14（418）（北史卷21）とあり、北史卷21を見ると列伝第9に崔宏の伝があり「泰常3年夏に宏は病がおもくなり卒した…」とある。泰常3年は北魏の年号で西暦418年、東晋の義熙14年と一致する。同伝によれば宏は後燕の慕容垂に仕え、その後北魏の道武帝、明元帝に仕えその泰常3年に卒した。父の潛は前燕の慕容暉に仕えたとあるから宏の生国は前燕かもしれないが確認はできない。この頃華北一帯は五胡十六国の時代で北魏統一までの間混乱期にあった。よって崔宏の生卒は（?～北魏・泰常3年 ?～418）としたほうがよいだろう。

P352/中/27～8/さいこう [崔・光] (北魏・?～普通四 ?～523)

普通は梁の年号である。歴代人物年里碑傳綜表P73に宋文帝・元嘉28(451)～梁武帝・普通4(523)(魏書卷67、北史卷44)とある。よって(?～梁・普通4 ?～523)、または(宋・元嘉28～梁・普通4 451～523)としたほうがよいだろう。

P356/下/26～7/さいりん [蔡・倫] (後漢)

桂陽の人、字は敬仲、宦者として生き、和帝の時中常侍となった。紙の創始者として知られる。……元興元年(一五〇)これを奏上するや、和帝大いに喜んでその能を嘉賞し、……

諸年表によれば元興1年は西暦105年、西暦150年は和平1年である。本書P130～131の紙の項の〔紙の起源〕の中に……一般には、後漢和帝の時、蔡倫が発明したと言われている。……まさに一大革命であったことは事実である。元興元年(105)これを奏上したところ、……とあり誤植と考えられる。よって元興元年(105)が正しい。

P357/上/8/さいれいしばし [崔令姿墓誌]

東魏の天平五年(五三八)の刻。……

諸年表によると西暦538年は元象1年である。天平は4年(537)まで5年はない。本書「李憲墓誌」の項には元象元年(538)とあり、存在しない年号を記した理由が判らない。本項に部分拓の挿図があるが記年の部分は出ていない。中国書道全集第2巻P80に部分拓図と蓋拓図、P230～231に

解説（西林昭一解説）があり天平5年（538）とある。中国新出土の書²⁶⁾ P142に記年部分まで見える拓図があり（文物1966年第4期参考）確かに天平五年と刻されている。現在のところ存在しない年号を刻した理由を考察することは出来ない。

P369/中/26～7/さんたくひつ【散卓筆】

……葉夢得の『避暑錄話』は「熙寧（一〇六八～一〇七八）の後世始めて無心散卓筆を用い、その風一変す」と言っている。これらから考えて散卓筆は一種の「さばき筆」と思えるが、「一変し」たことは特に注目を要する。

諸年表によれば熙寧は西暦1077年の10年までで西暦1078年は元豊1年である。1068～1077とするのが正しい。

P386/中/1/じせいぎょうばつ「持世経跋」

安周の承平四年（四四九）の写。「持世経」は今佚してなく、その跋三字が残っている。「持世第一、歳在己丑涼王大且渠安周所供養経、呉客丹陽郡張然祖写、用紙廿六枚」とある。これによってこの年、即ち劉宋の元嘉二六年（四四九）に都建業地方出身の張然祖という者が遠く甘肅の北涼の地に「呉客」として僑居していてこの経を書写したことが知られるが、

.....

北涼は西暦439年（北涼・永和7/北魏・太延5）に北魏に滅ぼされているので西暦449年には存国しない。文中に甘肅の北涼の地にとあるからこれは国亡後に北涼の遺民が西走して建てた高昌国（本書P277高昌国の項

参照)の年号と知れる。しかし東方年表、必携中国美術年表、中国歴代年表などいずれにも高昌の年号資料がなく検証できない。中国書道全集第2巻P240に沮渠封戴墓表/高昌・承平13年(455)の解説(藤原有仁解説)がありそこで同時出土の沮渠封戴墓表についても言及し墓表銘文を示し、その冒頭に「大涼承平十三年」とあり北涼後裔の政権で承平はその年号であること。治世は沮渠安周で彼は劉宋から河西王に封ぜられ涼王と称したこと。我が国では通常、沮渠氏高昌国と呼ぶこと。北涼滅亡から高昌に拠って北涼政権を再建し安周に至るまでの経過などを述べている。また中国新出土の書P128～9にも沮渠封戴墓表と沮渠封戴墓表の図版と解説があり同前の説明がある。ヴィジュアル書芸術全集第5巻²⁷⁾ P109にも沮渠封戴墓表/高昌・承平13年(455)と沮渠安周功德碑/北涼・承平7年(449)の図版と解説がある。これらによりこの西暦は正しく年号が4年ではなく7年であると判る。より判然とさせるには高昌沮渠安周・承平7年(449)とすればよいだろう。(付記、読みは「じせいきょうばつ」でも可)

P400/下/4/しゃそう [謝・莊] (劉宋・永初二～泰始二 421～466)

陽夏の人、字は希逸、*靈雲の族弟である。……

雲ではなく運が正しい。靈運である。本書P402 [謝靈運] の項参照。誤字誤植であろう。

P423/下/7/しゅくふぼん『肅府本』

……初拓本は太史紙・程君房墨を用い、善美をつくした。拓工ひそかに售るに値五十千といわれた。……

誤植と思われるがこの表現では数値が判らない。現在のところ資料がなく未検証。

P425/上/9/しゅじき [朱・次琦]

南海の人、字は子襄、稚圭また稚珪と号した。道光二十七年（一八四九）の進士、襄陵知県に官したが、やがて九江郷に隠居、専ら後進を導くことにつとめ、九江先生と称された。……

諸年表によると道光27年は西暦1847年、西暦1849年は道光29年である。書道辞典P343の朱次琦の項（赤井清美解説）に道光27年の進士とあり、西暦が誤っていることが判明する。道光27年（1847）が正しい。

P430/上/7/しゅはくざんぴ「朱博残碑」

前漢の河平年間（前二八～二四）の刻と伝えるもの。……

前漢の河平は1～4年で西暦B.C.28～25である。西暦B.C.24は陽朔1年である。よって河平年間（前28～25）とするが正確。

P438/中/28/しょうか [蕭・何] （前漢）

沛の人、早くから高祖を佑けて漢の建国に奔走し、……

歴代人物年里碑傳綜表P6に？～前漢・恵帝2年（B.C.193）（史記卷53、漢書卷39）とある。生年は不明であるが記述から考察すれば戦国末から秦にかけての頃であろうか。

P506/中/24/しんきんせきこくじ『秦金石刻辞』

民国の*羅振玉輯。秦代文字の今に遺存することごとくを網羅したもの。金石陶の三類に分ち、……陶は残量三六・瓦当六。秦一代の制はことごとくここに備っている。……

残ではなく陶が正しい用字である。陶製の項にあるし陶量という陶製の升がある。誤植であろう。

P515/上/21/しんどうご「進道語」

元の*了庵清欲の書、至元七年（一三四一）正月一七日とあるから五四歳の執筆である。与えた相手は「的蔵主」とあるが何人か不明である。趙子昂風の書で温潤端正である。東博蔵。

諸年表によると至元は6年（1340）までで7年はない。西暦1341年は至正1年である。定本書道全集第11巻²⁸⁾ P21に図版、書道辞典P855の了庵清欲の項に解説（堀江知彦解説）と図版があり確かに至元七年と書されている。存在しない記年については正月一七日とあるから単に改元を失念していたことによる書き誤りと想像することも可能だが別の理由が何かあるのかもしれない。しかし現在のところ未検証。

P519/上/5/しんほうじぞうしんようぞうひ「信法寺造真容象碑」

唐の長安三年（七〇一）の刻。撰書者未詳。行書三五行・行五六字。張黑力などの創建するところである。河北元氏県の信法寺にある。

諸年表によると長安3年は西暦703年である。西暦701年は大足1年または

文林 三十六号

長安1年である。年号、西暦のいずれが正しいのか現在のところ資料がなく未検証。

P543/中/8/せいしんによちほうぞうぞうき「清信女顧知法造像記」

北魏の皇興五年（四七一）の刻、上に樹下思惟像を二軀並列し、その左右に脇侍を添え、その下に正書八行を刻している。皇興四年といえば石刻例も少ないところで、……

皇興五年と前述しているので四年は誤植であろう。五年としてよいだろう。

P568/下/17/せつもんかいじけんきゅうほう『説文解字研究法』

民国の*馬叙倫撰、……民国一八年（一八二九）上海商務印書館石印本がある。

諸年表によると民国18年は西暦1929年、西暦1829年は清・道光9年である。書道辞典P426の同項目（田辺豊解説）に民国15年（1926）成り、17年重定された。とあり民国18年（1929）が正しいと考えられる。西暦の誤植であろう。

P586/中/18/せんしょう [銭・松] (清・慶嘉一二～咸豊一〇 1807～1860)

慶嘉の年号はない。清の年号なら嘉慶であろう。書道辞典P431の同項目（小林斗盞解説）に清・嘉慶12～咸豊10（1807～1860 54歳）とあり誤植と考えられる。嘉慶が正しい。

P601/下/12/そうえいひ「宋璟碑」

挿入位置に問題あり。P597そうえいきばし「宋永貴墓誌」の後に移動。

P609/上/2～3/そうしょく〔曹・植〕（後漢・初平三～魏・太和六 191～232）

諸年表によると後漢・初平3年は西暦192年、西暦191年は初平2年である。歴代人物年里碑傳綜表P34に漢獻帝・初平3（192）～魏明帝・太和6（232）（三国志巻19/魏書、丁晏陳思王年譜、朱緒曾曹子建年譜）とあり、中国歴代年譜総録P57に漢初平三年生、魏正元元太和六年卒（192～232）とある。よって西暦191年は誤植であろう。192年が正しい。

P610/下/10/そうしんざんぴ「曹真残碑」

魏の太和年間（二二七～二三五）の刻。……

諸年表によると魏の太和年間は西暦227～233年である。233年2月に青龍に改元されているので西暦235年は青龍3年である。ヴィジュアル書芸術全集第4巻P28～9に図版と解説があり、曹真は太和5年（231）亡なのでこの頃のものであろう魏・青龍3、4年（235、6）頃としている。書道辞典P441（鈴木清雪解説）には残欠して紀年は不明だが、青龍3、4年（235～236）ころと推定。とあり、中国書道史年表²⁹⁾ P32に魏・青龍3年（235）頃とある。本書の表記を尊重するなら太和年間（227～233）とし、最近の説に拠るなら魏・青龍3、4年（235、6）頃とするのが妥当と考える。

P614/中/10/ぞうてきしょうにんげじゅ「贈的上人偈頌」

元の＊平石如砥の書。至元四年（一二六七）的上人（伝未詳）が天台山国清間の鷹蕩に行くにおくった偈、七一歳の作である。すべて八行、終りに「天童平石叟如砥」とある。元代風趣の色濃きもので、極めてまれな平石の墨跡として珍重される。

諸年表によると元・至元4年は西暦1338年、西暦1267年は蒙古・至元4年である。定本書道全集第11巻P33に平石如砥の道號頌の図版があり、それに「至正八□戊子仲春……年八十有一」と書かれている。元の至正8年戊子は西暦1348年でこの時81歳なら71歳は至元4年（1338）となる。とすれば本項の西暦1267年は誤っており1338年が正しい。

P626/下/8～9/そしゅうきんせきろく『楚州金石録』

民国の＊羅振玉輯。……民国十一年（一九三六）刊。

諸年表によると民国11年は西暦1922年、西暦1936年は民国25年である。年号、西暦のどちらが正しいのか調査すべきであるが現在のところ資料不足のため未検証。

P633/中/16/そんこうどうぎょうひ「孫公道行碑」

元の元統三年（一三三五）の刻、鄧文原撰、＊趙孟頫書、最晩年の作で、死後に建立されたもの。道士孫徳^い彧の碑である。王世貞は「甚だ骨を取らざるも、姿韻波^い弘の間に溢出す」といっている。鄧県の管内にあるという。

東方年表によれば元統は2年までで3年はない。西暦1335年は至元1年である。中国歴代年表も西暦1335年は至元元年と改められていて元統3年はない。必携中国美術年表P101には元・元統1333～1335（3年）とあり元統3年がある。現在のところ本碑の写真、拓本なども目撃していないし元の至元3年の存否についても未確認。

P646/中/9/たいしん〔戴・震〕（清・雍正一～乾隆四二 1723～1777）

休寧の人、字は慎修、東原と号した。乾隆三十七年（一七七〇）の挙人、……

諸年表によると乾隆37年は西暦1772年、西暦1770年は乾隆35年である。図解書道史第5巻³⁰⁾ P161に、乾隆37年（1772）郷試に挙げられとあり、西暦が誤っていることが判明する。乾隆37年（1772）が正しい。

P648/中/6/たいちどろん「大智度論」

北魏普泰二年（五三二）書写の古写経。ペリオ文書の一で、パリの国民図書館の蔵。巻首を闕くが、末尾は具っていて「大智第廿六品釈論竟」とあり、次に本文とは別筆で三百字ほどの長跋がある。……

前出の本書P145「韓震墓誌（かんしんぼし）」の考察と同様である。ヴィジュアル書芸術全集第5巻P144に図版と解説があり、それによると確かに「普泰二年歳次壬子三月乙丑朔廿五日己丑……」と書かれてあり歳次壬子は西暦532年で合っている。またその3月は東方年表などでは中興で普泰ではない。しかし中国歴代年表には北魏節閔帝（恭）普泰1年（531）、同2年（532）、更に同年（末？）永熙元年と改め永熙は3年（534）まで、とあり普泰2年3月は存在し得る。一方別の年号も併記されていてこれは

前述の東方年表などと一致する。これによれば東西二重政權の混乱期にあった当時の北魏において、地域によっては普泰2年（532）はあったと考えてもよいだろう。

P660/中/6/たんせきぎ『端石擬』

清の＊陳齡撰。端溪硯について考説したもの。……乾隆一五年の帰棹の序及び自序があるが、久しく日の目を見ず、同治十一年（一八七三）にいたって、七世の孫方瀛によって静園叢書中に刊入された。……

諸年表によると同治11年は西暦1872年、西暦1873年は同治12年である。年号、西暦のどちらが正しいのか調査すべきであるが現在のところ資料不足のため未検証。

（以下次稿）

- 1) 研究紀要第42号P17～32 平成13年3月 神戸松蔭女子学院大学/神戸松蔭女子学院短期大学発行。
- 2) 中国書道辞典 中西慶爾編 昭和56年1月20日初刷発行 木耳社刊。
- 3) 東方年表 藤島達郎・野上俊静著 1955年1月15日初版/1998年3月20日第33刷発行 平安寺書店刊。
- 4) 必携中国美術年表 山崎重久編 1983年9月16日初版発行 芸心社刊。
- 5) 新選漢和辞典改訂新版 小林信明編 昭和38年4月10日初版/昭和42年3月10日改訂新版4版発行 小学館刊。
- 6) 大漢語林 鎌田正・米山寅太郎著 平成4年9月16日初版発行 大修館書店刊。
- 7) 歴代人物年里碑傳綜表 姜亮夫纂定 1976年5月発行 中華書局香港分局刊。
- 8) 東方年表、必携中国美術年表、新選漢和辞典改訂新版付録/中国学芸年表、必携中国美術年表、中国歴代年表。
- 9) 北京大学図書館蔵歴代金石拓本精華 1998年 文物出版社刊。
- 10) 書道辞典 飯島春敬編 昭和50年4月25日初版発行 東京堂出版刊。

- 11) 中国書道全集第2巻/魏・晋・南北朝 1986年5月28日初版発行 平凡社刊。
- 12) ヴィジュアル書芸術全集第4巻/三国・東晋 西林昭一著 平成3年6月20日発行 雄山閣出版刊。
- 13) ヴィジュアル書芸術全集第2巻/秦漢Ⅰ 飯山三九郎著 平成4年7月20日初版発行 雄山閣出版刊。
- 14) 中国印学年表 韓天衡編著 1987年1月初版 上海書畫出版社刊。
- 15) 中国石刻大観/資料篇4/北魏(2) 主編/秦公 1992年3月21日初版発行 同朋社刊。
- 16) 中国歴代年譜総録/増訂本 楊殿珣編 1996年5月第1版 書日文献出版社刊。
- 17) 中国歴代年表 齊召南著/山根倬蔵訳補 昭和55年2月29日発行 国書刊行会刊。(但し昭和2年刊行本を原本とした復刻本である)
- 18) 中国の歴史第3巻/魏晋南北朝P345～347 川勝義雄著 昭和49年8月20日第1刷発行 講談社刊。
- 19) 中国の歴史第2巻/秦漢帝国P424 西嶋定生著 昭和49年7月20日第1刷発行 講談社刊。
- 20) 中国の歴史第3巻/魏晋南北朝P345～346 前出 15) 参照。
- 21) 中国書道全集第4巻/隋・唐Ⅰ 1987年2月25日初版発行 平凡社刊。
- 22) 歴代人物年里碑傳綜表P44に江式の項があるが、?～魏高貴郷公・甘露2(257)(古今文字)とし北魏ではなく三国時代の魏になっており時代が合わない。
- 23) 新選禅林墨場必携 飯田利行編 1989年12月10日第1刷発行 柏書房刊。
- 24) ヴィジュアル書芸術全集第8巻/元・明 澤田雅弘著 平成4年11月5日第1刷発行 雄山閣出版刊。
- 25) 法帖事典/本論編 宇野雪村著 昭和59年8月5日発行 雄山閣出版刊。
- 26) 中国新出土の書 西林昭一著 1989年2月10日初版発行 二玄社刊。
- 27) ヴィジュアル書芸術全集第5巻/南北朝 大橋修一著 平成3年10月20日発行 雄山閣出版刊。
- 28) 定本書道全集第11巻/墨蹟 昭和31年12月28日発行 河出書房刊。
- 29) 中国書道史年表 玉村霽山編 1988年7月10日初版発行 二玄社刊。
- 30) 図解書道史第5巻 藤原楚水著 1973年2月20日初版発行 省心書房刊。